

Title	NEWSLETTER 聖学院大学総合研究所 : Vol.21, No.1, 2010
Author(s)	聖学院大学総合研究所
Citation	総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.1, 2011.6 : 0-29
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=3095
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

[巻頭言]

- 1 牛津信忠
社会福祉理念の普遍性と今後の社会展望
——東日本大震災のこのときに思う

[研究ノート]

- 2 チェンバレン 暁子
マルチメディア支援ソフトを利用した映画英語授業
-L³Stage EZVを利用した授業について-

[報告]

- 5 田澤 薫
石津靖大氏報告「興について」
- 8 田澤 薫
松本祐子氏報告「魔法にかけられた子どもたち」
- 12 秀村智香、高橋成子、大島知子
第7回ピア・スーパービジョン

[共同研究報告]

- 15 アメリカ憲法と日本国憲法

[教員活動報告書] (2010年度)

- 16 深井智朗、松谷好明、宮本悟、Brian Byrd、藤原真知子

総合研究所News

- 23 学術セミナー「北朝鮮問題と日韓米の対応」
- 27 第7回ピア・スーパービジョン

《 総合研究所の活動 2011年4月1日から5月31日 》

共同研究	回数	開催日	研究発表者	主 題	人数
児童学研究	第1回	4月6日	松本祐子（聖学院大学教授）	魔法にかけられたこどもたち	19名

人間福祉スーパービジョンセンター	スーパーバイザー	実施日	人数
個別スーパービジョン	柏木 昭（聖学院大学総合研究所名誉教授）	4/1、4/3	2名
4月20日	スーパービジョンセンター委員会	活動報告、2011グループ・スーパービジョンについて、書籍製作について	

カウンセリング研究センター心理相談	カウンセラー	実施日（月曜日）	人数
赤坂グリーンケア・ルーム	藤掛 明（聖学院大学大学院准教授）	4/11、4/18、4/25、5/9、5/16、5/23、5/30	8名
	村上純子（聖学院大学非常勤講師、カウンセラー）	4/11、4/25、5/9、5/23	4名

日韓現代史研究センター	
5月12日	日韓現代史研究センター委員会 1.国際シンポジウム「東アジアの平和と民主主義」に対して国際交流基金からの助成決定について 2.日韓教会交流史研究会日程変更と長老会神学大学校との協議 3.日韓教会交流史研究の分担について 4.日韓教会交流史研究資料室設置のこと 他

聖学院キッズ英語	講 師	実施日	人数
幼稚園クラス	ブライアン・バード（聖学院大学総合研究所特任講師）、藤原真知子（同）、ジャスティン・ナイティンゲール（同）、西嶋小百合（聖学院大学総合研究所委託講師）、山根真由美（同）	4/11、4/18、4/25、4/26、5/9、5/10	36名
小学生クラス		4/8、4/13、4/15、4/19、4/20、4/22、4/26、4/27、5/6、5/10、5/11、5/13、5/17、5/18、5/20、5/24、5/27、5/31	69名

研究会議	
5月18日	日本基督教団総会議長 石橋秀雄牧師を囲んで。「東日本大震災を教会としてどう受けとめるか」大木英夫、東野尚志、松本周

Faculty Meeting	
4月20日	2011年度研究計画の発表
4月27日	大木英夫所長「神に迫られた改革—東日本大震災」をめぐって、特任研究員 川田牧人、豊川慎、鈴木幸、斉藤信氏の紹介

総合研究所委員会	
5月16日	第1回 委員12名のうち、10名出席、1名委任状で成立。議題：1.2010年度総合研究所活動報告案の承認の件 2.特任研究員を海外に留学させる計画案承認の件 3.聖学院大学出版会規程制定の件 4.聖学院大学出版会出版計画承認の件 5.2011年度リサーチアシスタント採用の件 6.非常勤講師出講依頼承認の件

巻頭言

社会福祉理念の普遍性と今後の社会展望 ——東日本大震災のこのときに思う

東日本大震災のもたらした惨状に接し、社会福祉の「共生」「共育」また「共苦」「共楽」という言葉が脳裏に焼き付いてくる。それなくしては現実に人間生活が不可能になる状況を見せつけられ、その当たり前さを改めて思い知らされる。社会福祉は、震災の時に限らず、こうした生き方在り方を公的・私的に実践し、生活ニーズの不充足・不調整のある「人の生の場」に対して「支援・回復・予防」の働きかけをしている。

通常の社会生活のなかでは、こうした在り方は単なる絵空事に見える。しかし大震災の生じた日本においては、上に述べた人間の肩を寄せ合った生き方が日常のなかで明確な位置づけを持つことを再認識させられる。

原発問題を引くまでもなく、福祉にいう問題予防の視点がなんと等閑なおよびであったことかと嘆かれる。想定外が現実になったときに、その危機意識の希薄さと、問題予防力の脆弱さに驚く。それは人間が生きることとその生活基盤構築をあまりにも軽く考え、経済の効率基準に想定を限る在り方に過度に依拠した結果である。

今なすべきことは、人間存在の本来の在り方に添って社会を、特に「経済主義」のみに依拠するこの経済社会体制を再考、再構築していくことにある。そのために心を接した生活福祉を実践のなかから汲み取り、今、この現在に困難を背負う人々のところから、そこからの離脱のための支援や回復とともに、社会福祉の原点に帰って人間の生活問題への対応体制を問い、その予防的方途をも明確にしてゆくことが緊要である。

それは経済体制の中に、真の福祉主義を注入することを意味する。

かつてエドアルト・ハイマンが、資本主義も共産主義も、経済（主義）体制であると一括りして、そこから離脱して善き生活「Good Life」を旨とする「統合社会体制」へのビジョンを描いた。それによると経済（主義）体制は福祉国家や改革された社会体制を経て新たな体制に到る。そこでは参加し合って文化価値の創造をなす文化経済が成立し構造化する。その中心に福祉文化とそれを支える福祉経済があるという理解も可能である。とするならば、そこにおける企業の営みの内部には明確な善き生活、善き人生への希求性を包摂することになる。それは、あのmore and more（拡大主義）やそのための効率主義、また自己、自集団、自国にのみ中心を置くミーイズムからの脱却、さらには人間による判断の限界を忘れた「理性信仰」を問い返す。また関係性の中における個と共同の融和的在立を支える「相互律」（難波田春夫）を常態化することも求められる。

しかし近代を支えてきた拡大や効率、また個（自己）への執着を、現代人、現代社会は完全に捨て去ることは困難であろう。それでも、用心深くこれと付き合うことはできる。その用心深さを支える思想に触れておく。

その思想とは人間尊重の基本姿勢である。それは表面だけの人権論を越えた「人格主義」を基礎とする人間と社会への視点である。

ここに「人格」というのは、マックス・シェーラー流の人格を意味している。つまり「そこに見えている自我上の人格」を越えた、「見えないその人の内なる可能性」として永遠に続く人格をいう。われわれは、この内なる人格尊重の道に立つことにより、人間を物象化する経済主義から脱却していくことが出来る。特に人間とその社会の構築・運営等の対応姿勢を考えると、それは、そこに生きる人を物化的対象化して安易な判断を下すことなく、人間相互が真に生かされ合う道に対人的に社会的に探る行動基準の基礎を与えてくれる。

こうした在り方が、この大震災に直面した今、素直に思念されうる。既に阪神淡路においても、さらに溯って二次大戦の「戦災の後」等と、多くの時が与えられたのだが、これを教訓にできず、のど元過ぎれば熱さを忘れてきた。

犠牲に遭われた方々が身をもって教えて下さったことを、今回は決して忘れてはならない。この厳密に言えば「近代への警告」を忘れることなく、新たな歩み出しをなさねばならない。善き生活へ向かう「人格主義的な統合社会体制」とその現段階で考えられる福祉社会づくりを進めねばならない。それは人と人が可能性を求めて生き合っていくなかで他者の人格への参与（「存在参与」）を通じて相互に生き合っていくことからはじまる。

たとえ試行錯誤の揺れの中にあつたとしても、こうして近代の残像との相克とその軌道修正を繰り返し、「統合社会体制」を、さらにその先の社会への展望を交えながらたぐり寄せてゆけることを切望したい。

マルチメディア支援ソフトを利用した映画英語授業 － L³Stage EZV を利用した授業について－

チェンバレン 暁子

国際社会のグローバル化に伴い、英語コミュニケーション能力の必要性が一層高まる中、近年の目覚ましいICT（Information and Communication Technology）の発展に伴い、教育の場においても教材や教育機器のICT化が急速に進んできている。

聖学院大学では英語基礎科目に映画英語を教材とした授業を2003年度より開講している。映画を利用した英語授業は学生の興味を引きやすい上、オーセンティックな教材を利用した英語学習であることから開講当初から学生の間で好評な科目である。しかし、ナチュラル・スピードで話されている映画の英語は、比較的聞き取り易い部分を選んだつもりでも多くの学生にとって速すぎて難しいと感じることが多い。従来、映画を使った授業はTV画面や大型スクリーンで映画を見せながら一斉リスニングなどを行うことが多かったが、近年の英語教育の場におけるICT化のお蔭でCALL（Computer Assisted Language Learning）やPCLL（PC Language Laboratory）が普及し、学生一人一人が自分のレベルやペースに合わせてリスニングや発音の練習を行うことが可能になってきた。

以下、2010年4月に4202教室に新しく導入されたマルチメディア授業支援システム「L³Stage EZV」（PCLL）を利用して可能となった事を紹介し、次に学生と教員からのフィードバックと今後の展望について述べる。

I. L³Stage EZVで可能になった主要項目

A. 学生側の機能：

- ① DVDの映画映像・音声を学生各自のパソコンのハードディスクに一斉送信することで、「字幕あり」、「字幕なし」などの映像・音声や異なるシーンを学生が自由に選択して使用できる。

- ② 学生は、スピード・コントロール機能を使用し、±50%の幅で各自のレベルに合ったスピードで、映画のリスニングやディクテーションなどを行うことができる。（デジタル音声を利用することで、音質に殆ど影響がなくなった。）
- ③ 発音練習の形態を変えて、発音練習と録音を行うことができる：シャドウイング、リピートイング、アフレコなど。
- ④ 録音した音声を、直ぐにモデル音声と聞き比べたり、簡易スペクトグラム（波形パネル）で表示したりして、目と耳で自分の音声を確認することができる。
- ⑤ 「授業で使われたシーン」または「課題として選ばれたシーン」をUSBに保存して持ち帰り、自宅学習ができる。

B. 教員側の機能：

- ① 学習者の発音した音声を回収し、ファイルに保存して、後に評価する事ができる。
- ② アナライザー機能で、小テストや評価ができる。
- ③ 「授業以外のPC画面へのアクセスをブロックするための機能」や「教員モニターから学習者の全員のモニターを一瞥できる機能」が加わり、授業への参加を促す機能が付加された。
- ④ 従来のLLと同様に、学生の発音音声を一人一人、またはペアを指定し、練習している様子をモニターすることができる。

II. 学生のフィードバックと使用状況

2010年度春学期のECA（Cinema）Iを受講した53名の学生を対象に、L³Stage EZVで、どの機能が役立ったか、学期末にアンケート調査を行った。結果は、以下の通りである。

L³Stage EZVで役立つ機能：

「自分のペースで、繰り返し音声を聞いて学習できる」「スピード・コントロール」が共に68%と最も評価が高く、「発音録音機能」(12%)、波形パネル(簡易スペクトグラム)(8%)は、評価が低かった。

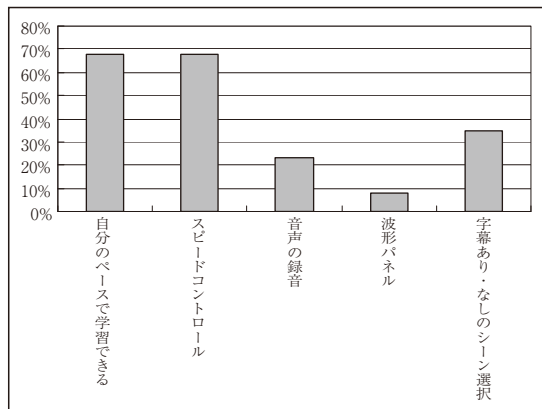


図1 L³Stage EZVで役立つ機能

使用状況：

L³Stageの利用には初回から数回、学生が慣れるまで教員のアシスタンスを要したが、その後は教材選択ミスなどのトラブルが時折見受けられる以外、特に問題は見られずスムーズに学習を進めることができた。

III. 教員の映像支援ソフト使用状況と感想

2010年度春ECA (Cinema) を担当頂いた教員5名にL³Stage EZVの使用状況に関して、アンケート

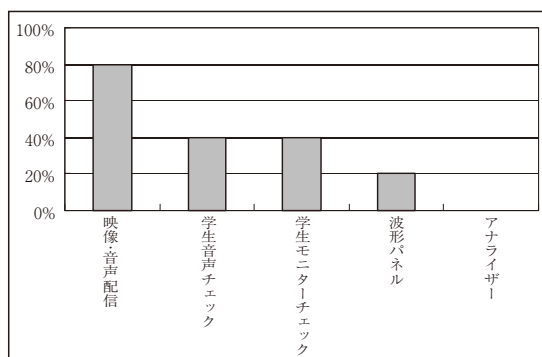


図2 教員が、学期中使用したL³Stage EZVの機能

ト調査を行った。結果は、以下の通りである。

学生のPCに映像音声を送信する機能を、80%の教員が、ほぼ毎回使用した。一方、スピード・コントロール機能や、音声を録音させモデル音声と比較する機能、波形パネルなどを使用した教員は、予想を遥かに下回った。これらの機能の使用は全て20%にとどまった。

ECA (Cinema) の授業を担当した教員は、学期の初めに、メーカーの使用説明会に1時間から2時間出席しているが、一学期利用した後の感想として、「授業で使いこなせるようになるには十分ではなく、操作が複雑なため、慣れるまでに時間を要し、不安を抱えながら授業に臨んでいた」、「頻繁に使い方のフォローが欲しかった」、「役に立ちそうだが、使わない機能が多かった」などの感想が多く聞かれ、授業での教員側を補助するアシスタンスが、相当必要であることと、操作に慣れるまでにかなりの時間を要したことが明らかになった。また、授業内で操作がうまくいかず、授業が中断することが何度かあったり、頻繁に機器のトラブルが発生したことなどの理由から、機器の使用を敬遠した教員が少なからずあったことは大変残念である。(尚、トラブルが生じた際は、8号館から教務課の方々が4号館まで駆けつけて対応して下さったお蔭で、教員は随分助けられたので、ここに感謝を申し上げたい。)

IV. 今後の展望

L³Stage EZVを利用した授業環境は、「学生一人一人の習熟度に合わせた学習環境を提供できる」ことから、学生には概ね好評であったが、他方で、「教員は不安を抱えながら授業を行っていた」ことや「機能が十分に利用されていなかったこと」も明らかとなった。最新テクノロジーを駆使しながら教員が安心して授業を行うことができるようにするためには、①複雑な機器の操作に慣れるまでのサポートや、②システム上のトラブルが発生した際、素速い対応ができるサポート・システム

を充実させることの2点が肝要であると思われる。また、教員の側も、操作に熟達するために一層の努力が必要であり、日々進歩するテクノロジーを効果的に利用することができるように、更なる工夫と研鑽が求められると言えよう。

参考文献

文部科学省.(2010).『平成21年度学校における教育の情報化の実態に関する調査結果』.

<http://www.japet.or.jp/Top/Cabinet/>

角山 照彦.(2008).『映画を教材とした英語教育に関する研究』.10-33. 岡山:ふくろう出版

澤田 茂保.(2007).『英語教育から見た技術の発展とIT利用の可能性について』『外国語教育フォーラム』,1:37-50.132-147

田中 深雪.(2006).『マルチメディア時代の通訳訓練 -CALLシステムとその有効活用について』.*Interpretation Studies*, No.6, December 2006, 183-196

東矢 光代.(2001).『CALLが外国語教育に及ぼす影響』(1).言語文化研究紀要 *SCRIPSIMUS*, No.10

チェンバレン 暁子(2011).『PCLLを利用した英語授業』『国際経営・文化研究』Vol.15 No.2

URL:

Panasonic L³Stage EZVについて

http://panasonic.biz/solution/system/education/edu_campus-02.html

CHJeru[チエル]については、<http://www.chieru.co.jp/products/academe.html>

(チェンバレン・あきこ 聖学院大学基礎総合教育部特任講師)

人間福祉

スーパービジョンセンター

対人援助の仕事をしている人を支援します

スーパービジョンとは？

スーパーバイザー（熟練のソーシャルワーカー）が経験の浅いソーシャルワーカーに対し、その人の能力を生かし、よりよい実践ができるように支援を行うものです。

<プログラム>

ピア・スーパービジョン

実践現場に必要な知識やかかわりを見直し自己点検をするための研修交流会である。講演、グループディスカッション、など
2011年10月15日(土)13:30～16:30
場所：聖学院大学4号館4階会議室*
料金：無料

個別スーパービジョン

個人の要望に応じた支援を行う。
1回1.5h程度、日時は相談による
場所：聖学院大学など
料金：1回6千円（卒業生2千円）

スーパーバイザー支援制度

スーパービジョンを行っている人を支援する。
1回1.5h程度、日時は相談による
場所：聖学院大学など
料金：1回8千円（卒業生5千円）

グループ・スーパービジョン

固定グループによる10回のプログラム。
毎月第2火曜日18:30～20:30
場所：新都心ビジネス交流プラザ予定*
次募集は2012年5月から3月の10回分

*JR埼京線北与野駅西口ロータリー前
またはJRさいたま新都心駅徒歩10分

連絡先 聖学院大学総合研究所

TEL：048-725-5524

research@seigakuin-univ.ac.jp

〈児童〉における「総合人間学」の試み研究

石津靖大氏報告「興について」

田澤 薫

「子どもの『領分』研究」を共通テーマとする今年度の〈児童〉における「総合人間学」の試み研究会の第5回研究会が2月23日(水)18:00～20:00、聖学院大学第二会議室において開催された。今回は、石津靖大氏（聖学院大学児童学科）に「興について」と題した報告をいただいた。報告の概要は以下の通りである。

「興（きょう）」については、2年前ほど前に海外に発つ家族を一人で空港に見送りに行った日の日記に、「飛び立っていくのを見送るのが「興」。白川（静：註）先生の言うところの詩経、万葉集の興の精神なのだ。そうだったのか」と書いたことが想起される。

「動機づけ」の一つに興味、関心がある。興味の「興」の字には「同」が含まれている。保育系の学科に所属することになったとき、保育の領域でよく言われる「興味があるから遊ぶ」とか「興味が無いから遊ばない」ということがよく分からなかった。「興味が無いので遊ばない」とはどういうことなのか。そこで、字からこの問題を考えることにした。

「興」の上部中央は「同」。その両側は「キョク」といって手を意味する。下の部分は、下側から手を出している意である。白川先生によれば、上と下から、時によると前後から「同」を持っているといわれる。『字統』にも「興」の「同」の部分はいわゆる神興とされている。一番古い「興」は甲骨文の字で「同」を下から両手で持っていると言われているが、それが同じ甲骨文でも少し時代が下がると「同」を上から持っていると言われ、「同を持っている」のではなくて興を担いでいる、つまり共同して担いでいると説明されている。転じて心が高ぶる、感動する、喜ぶという意味をもつ。

白川先生の仕事は『字統』、『字訓』、『字通』と

いう大きな辞典にまとまったが、その辞典になる前に「興の原義」という小さな文章がある。1980年に刊行された講談社学術文庫『中国古代の民族』に「興の原義」は収められている。ここでは、「興」の「同」は酒器だと説明される。形から明白だが、酒器は伏せられている。つまり、酒器を逆さにしてお酒を土地にふり注いでいるという字形であるという。中国の古代の民族の灌祭については礼記に記述がある。「灌地の礼」として大地にお酒を注いでいる様子をこの字は表している。なぜ大地にお酒を注ぐのか。これは、その土地の神霊を呼び起こしているのであり、なるほど「興」には「興す（おこす）」という意味がある。土地の神霊を呼び起こすことによって応えてもらうために「興」という祭りをしたと考えていいだろう。

「釁（きん）」については、白川先生は上の部分は「興」であるといわれる。下の部分は「酉（ゆう）」でさんずいをつけたら酒になるのでお酒の意味である。その下の部分は「分ける」という字であるから、これはお酒を人にかけている意である。「キンモク」とか釁浴という、釁礼という儀式が残っている。「興」との比較で言えば、儀式としてお酒を人にかけるときは「釁」で、これを大地にかけるときは「興」だという説明になる。

沖縄の祭りを撮った写真家に比嘉康雄先生がいる。比嘉先生の生の祭りは、あるものの記憶の名残だという捉え方がある。深いところにあるために本体は分からないものの、きっかけになる記憶の名残が比嘉先生の写真の動機だという理解である。ここでいう記憶の名残という断片は、日本の祭りの「底」である。祭りは何かの記憶であって、さらにそこから記憶の底に下りていく。「興」の字形は何かの記憶である。この字ができる前からずっとあるものの記憶の名残である。「興味が無いから遊ばない」という課題に取り組むときに、

「興」の中に記憶があるという理解が成り立つ。

藤田省三先生が亡くなった時に、高島通敏先生が朝日新聞に「時代と格闘した自由な精神」と題する弔辞を出されたが、次はその一節である。

「豊かな社会に自足し、安楽への全体主義にひたっている現代日本は、…しかし、その中で彼（藤田省三先生：報告者注）は、隠れん坊という人類共通の子どもの遊びに敗者を包み込む自由な相互主義の精神の原型があり、現代の子どもがその遊びを喪失したことが生活の全体主義を蔓延させていることを非常に軟らかい文章で書いた」

ここでいわれている「隠れん坊」とは藤田先生の『或る喪失の経験—隠れん坊の精神史』（1981年）を指す。同書の「おとぎ話」に関する言説によれば、おとぎ話は「かつての古典的な祭式の構造体」から発したこと、「実在性の力説強調を放棄して、非実在的に経験の存在を示す方法を身につけた」ことの指摘がある。「あったか、なかったかは知らねども、あったこととして聞かねばならぬという話し方がそこに生まれた」と言われ、その主題を子どもの世界で展開するのがおとぎ話であると述べられている。藤田先生のいうところの「かつての古典的な祭式の構造体」という箇所研究動機を得た。例えば昔話の桃太郎には「じいさん山へ芝刈りに、ばあさん川へ洗濯に」とあるが、これが「興」ではないか。「山へ芝刈りに、そして川へ洗濯に」という、この言葉が記憶している古代の人々の信じ方をこの言葉は持っている。それでは、桃太郎の中で何が主題として呼び起こされたのか。そして、それに応えて現れてきたものは何であったか。現れてきた桃は何なのか。桃太郎の昔話の一番大事な部分は「じいさん山へ芝刈りに、ばあさん川へ洗濯に」だろう。あとは、その説明にすぎない。「おとぎ話はかつての古典的な祭式の構造体」なのである。

藤田省三先生は1971年3月に法政大学教授を依頼退職して、猛烈な勢いでいろはの「い」から勉

強のやり直しを始めたという。白川静の『設文新義』を座右に置きながら史記を漢文原典で精読した、と。実は、1971年に『説文新義』を手に入れるのは困難である。これはある小さな勉強会のための授業案で、白川先生がガリ版を切って謄写板で刷って用意されたものを1969年に五典書院から刊行した。それを藤田先生が1971年の前に入手されたことに驚かされる。藤田先生の『隠れん坊の精神史』の背景にも、白川先生の研究成果が影響を与えていると思われる。

森下みさ子先生が、以前のこの研究会の菅原啓州先生による「くまのプーさん」の報告の回に、「子どもにとって親和な関係にある階段というものを媒介にして身と体の差異をあぶり出した」という見事な表現をされた。また、菅原先生は石井桃子著『幼ものがたり』を最高の一冊として挙げられたが『幼ものがたり』も記憶である。わずかな記憶から階段を下りていく、精神の底についていくという共通点がある、と思われる。

白川先生は6歳の1970年に岩波新書から『漢字』を刊行して広く読まれた。同時に中公新書から『詩経』を出した。つまり文字と歌謡の本が同時に出版されている。1962年に発表された「興の研究」（立命館大学大学院修士課程授業案：本論文で京都大学から学位授与：『白川静著作集』所収、2000年）はガリ版で、『稿本詩経研究』（通論篇、解釈篇、1960年：立命館大学大学院の授業案）の別冊付録として出された。つまり、歌謡である詩経研究における、歌の「興」に関する研究ということになる。それ以前の白川論文は、完全に古代文字の研究である。白川先生は、古代の祭祀研究にも取り組まれた。「興」は灌地の礼だという理解もここから生まれている。祭祀と習俗は関わりがある。文字に関して、文字学では追れない歌謡から分かることが多くあるということが『詩経』で気づかされる。白川先生は1979年に『初期万葉論』（中公文庫）を出した。万葉集は、中国の詩経に匹敵する日本最古の歌謡である。白川静とい

えば漢字学者として知られているが、本書から白川先生は万葉集の研究家だと確信される。万葉集を研究するために詩経を研究し、詩経に取り組むために徹底した古代文字の研究が必要だった。なぜ万葉集を研究するかといえば、古事記や日本書紀では分からない日本人の精神の底が、普通の人の生活が謡われている万葉集からは知れるからだろう。

詩経研究・万葉集研究において、白川先生はたびたび「興の発想」という表現を使う。それはどんなものか。よく引用されるのは詩経の一番最初に出てくる有名な歌である。

「關關（かんかん）たる雉鳩（しよきゅう）河の洲（あ）にあり、窈窕（ようちょう）たる淑女、君子の好逑」これが1番目。2番目は「參差（しんし）たる苜蓿（こうさい）は左右に之をとる」そして「窈窕たる淑女は寤寐（ごび）に之を求む」

松本雅明氏は、詩経の風潮をふまえて詩経において「興」はどんなものかという検討に取り組み、詩経の中の「興」は気分象徴を表しているという感覚的に解釈する説を唱えた。一方で白川先生は、「關關たる雉鳩」を「鳥が鳴いていることを歌っている」として、特に渡り鳥に対して定まった時期に先祖が必ず帰ってくるという考え方があったことから、鳥が鳴いていることが先祖の魂の帰還を祀るということ呼び起こす動機となっていると説明している。

万葉集の八巻の一四二七に「明日よりは春菜摘まむと標（しめ）し野に昨日も今日も雪は降りつつ」、「難波辺に人の行ければ後れ居て春菜摘む子を見るがかなしさ」とある。願い事を成就するために、神様への約束として決められた（示した）日時に注連縄で決められたその若草を摘んで籠いっぱいにするはずが昨日も今日も雪が降ってできない、という歌意である。願い事を成就させることが「春菜摘む」ということなのである。詩経の「卷耳」は、ハコベの一種でネズミの耳といわれる植物の「卷耳」を摘む歌で、「卷耳を采（と）

り采るも頃筐（けいきょう）に盈（み）たず、嗟（あ）あ、我人を懐（おも）うて彼（か）の周行（しゅうぎょう）に眞（まこと）く」とある。やはり草摘みだが、人を懐うて周行（道路）に置く。摘んでいる女性の関係するその人が行った道に置くという意味である。卷耳の草を採るという言葉は、実はその言葉自身が「願い事がききますように」という呪い言葉であり、この言葉の前に草を採るという行為がある。そして、それを歌に詠むというそのことも呪能を持つと白川先生は言いたかったと思う。

最初に紹介した日記のように、飛立つ家族を見送る行為を歌に詠み、それが神霊を呼び起こして神霊がそれに応えるということを感じていた時代がかつてあった。折口信夫先生がよく言う言霊である。言葉はその通りであるという。「興」という字の形が、呼び起こして主題を応えさせることが「興」であると信じている。すなわち、「興」は動かないものも動かす。動かないものを動かす方法が「興」で、その方法によって動かないものが動くことが「遊（ゆう）」である。つまり、「興」がないとなぜ「遊ばない」のか「遊べない」か、ということである。

（文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科准教授）

〈児童〉における「総合人間学」の試み研究

松本祐子氏報告「魔法にかけられた子どもたち」

田澤 薫

2011年4月6日、今年度最初の〈児童〉における「総合人間学の試み」研究会の例会が開催され、年間テーマ「表現された子どもを読む」の最初の発題として本学児童学科の松本祐子氏が「魔法にかけられた子どもたち」と題して報告された。児童文学・絵本を多数回覧しながらの報告に会場は大いに盛り上がった。報告の概要は以下の通りである。

「魔法にかけられた子どもたち」として論じるべき対象は2つある。魔法が出てくる物語の中で魔法的体験にさらされる子どもたちと、物語の読者である子どもたちである。

物語の中で子どもたちを魔法にかけるのは、魔法使いや妖精のような魔法的存在あるいは魔法的空間である。もちろん、これらを生み出したのは物語の書き手である。物語を書くことは、言葉によって世界をつくりだす行為である。作家は自分の読者をいかに魅了するかに力を尽くす。「魅了する」にあたるenchantは、魔法をかける、誘惑するという意味をもつ。作家が読者を魅了しようとすることは魔法物語に限らない。そのため児童文学では、読者の子どもたちを魔法にかけられた状態にすることが書き手の最大の目標と言える。

登場人物の子どもたちが魔法に関わる児童文学には大きく分けて2つパターンがある。第1には魔法を使う子どもたちで、この場合は魔法が特別な才能のメタファーとなる。例をあげれば、『ハリー・ポッター』、『ゲド戦記』がある。第2には魔法にかけられた子どもたちで、普通の子どもたちが何かのきっかけで特殊な魔法的空間を訪れたり、または魔法的存在に導かれて魔法的経験をする。特別な才能を持っているわけではないという点で、こちらの子どもの方が読者に近い存在である。本報告ではこちらを扱う。例えばイギリス文

学では『ふしぎの国のアリス』、『くまのプーさん』、『ライオンと魔女』、『ピーター・パン』、『メアリー・ポピンズ』、『砂の妖精』、ドイツ文学では『はてしない物語』、日本の作品には『千と千尋の神隠し』がある。

最初に「かどわかされる子どもたち」について検討したい。子どもはなぜ魔法と相性がよいのか。大人が魔法的なものに警戒心を抱き本能的に魔法を否定しようとし、特に子どものいる大人—親は子どもを魔法的なものから守ろうとする傾向があるのに対して、子どもは魔法的なものを受け入れ歓迎する傾向にある。それに呼応するように、妖精は人間の子どもの近づきたがる。これは、乳幼児死亡率が高い時代において子どもの死を魔性の存在に連れ去られるとして説明する親の不安意識の反映とみることできる。その意味で子ども部屋に子どもをさらいに来る魔物、「子ども部屋への侵入者」に着目したい。

アイルランドの伝承で「妖精の取り替え子」、チェンジリングという言い伝えがあり、多くの作品でモチーフとされている。シェイクスピア『夏の夜の夢』にも、妖精王オーベロンと女王タイターニアがインドからさらってきたかわいい赤ん坊を取り合って仲たがいの場面ある。センダックの『Outside Over There』（邦訳『まどのむこうのそのまたむこう』）のテーマは、チェンジリングである。親の側からすると誘拐やかどわかしとしか言えないチェンジリングが、子どもにとっては必ずしも否定的体験ではない。例えば『ピーターパン』では、親の留守を狙って子ども部屋の窓から侵入してきたピーターパンを、子どもたちは歓迎し、誘われるままにネバーランドに飛び立つ。『メアリー・ポピンズ』は子どもたちの両親から正式に認められた乳母であり、誘惑者の側面と保護者の側面を併せ持つ。子どもたちは、親が気づかな

いうちにメアリー・ポピンズに導かれて様々な脅威を体験するが、この場合の冒険はあくまで「保護者同伴」の様相を呈している。

本来子ども部屋は安全に子どもが守られる場所で、通常は親の管理下にある。そのため児童文学では、子どもが魔法的体験をする要件として親元を離れる筋書きが多い。『砂の妖精』においても、『床下の小人たち』のメアリー・ノートンの別の作品『魔法のベッド』においても、ナルニアの『ライオンと魔女』においても、子どもたちが魔法的存在に出会うのは親の保護と束縛から離れた時である。親元を離れて魔法的な存在に会う中で子どもたちは自分自身の力を試されるのが、魔法ファンタジーの王道的なストーリー展開であろう。

次に、異世界に行かず日常の中で魔法的存在と関わる、いわゆるエヴリデイ・マジックについて見てみたい。エヴリデイ・マジックという語は、日本でのみ定着した和製英語と考えられる。日常世界の中で不思議な出来事に遭遇する等身大の子どもの姿が描かれる。20世紀初めに発表された『砂の妖精』では、4人きょうだいと赤ちゃん1人が、夏を過ごすためにロンドンから田舎にやってくる。父親は急な仕事で、母親は病気の祖母のお見舞いで出かけてしまう。ヴィクトリア朝時代のイギリスは児童文学の黄金期といわれるが、中産階級では親は子育てに直接的に関わらず親が子ども

の側にいない時代的特質が指摘できる。両親不在の場所で庭の砂を掘っていたら、砂の妖精サミアドが出てきて1日に1つ願い事をかなえてくれるという。かなったことは日没とともに消え、子どもたちはかなえてもらった願い事のお蔭でひどい目に遭い自力で切り抜けなければならない。この物語の原題は『Five Children and It』で、サミアドはItでしかない。サミアドの魔法は安直で他愛なく、科学の時代にあっては子どもたちの心の中にしか存在できない印象を与える。子どもたちは、秘密を大人に話せば魔法がたちまち失われることが本能的にわかっている。『メアリー・ポピンズ』のメアリーは大胆で、子どもたちの母親バンクス夫人の鼻先で不思議な力を行使するが、バンクス夫人はまったく気付かない。常識で目を曇らされた大人と、見たままを受け入れる力のある子どもが対照的に描き出される。『トーマス・ケンプの幽霊』も典型的なエヴリデイ・マジックである。一家が引っ越した家に過去の魔術師の幽霊が住み付いていることに、男の子が気付く。親は不思議な現象を全て息子のせいにする。息子は騒ぎの張本人にされて非常に迷惑する。魔術師の幽霊は、実は以前にも別の子につきまとって困らせたことがあるが、この幽霊が子どもにだけ自らの存在を誇示するのは単なる偶然ではない。物事をありのままに信じ受け入れる子どもの柔軟性に引き寄せられるのである。エヴリデイ・マジックでは、きょうだいの中でも1番年下の子が最初に気が付くものが多い。『となりのトトロ』も、姉のサツキよりメイが先に気が付く。『スノーマン』のレイモンド・ブリッグズの『おぢさん』という作品は、小人がわがまま放題言い出してとんでもない迷惑を子どもにかけ、数日後にいなくなる。大人の前には姿を現したらいけない、子どもだったら少し世話してくれるとわかっていて子どもの前におぢさんは現れる。

エヴリデイ・マジックの物語では、子どもたちが出会う不思議な存在は、物語の最後で子どもた



大学4号館4階第2会議室にて開催され、19名が参加した

ちの前から去っていく。子どもたちと魔法との蜜月は短い。魔法との別れは、子どもたちが成長して大人になっていく運命を象徴的に示している。

『ドラえもん』もエヴリデイ・マジックだが、ドラえもんは何十年間ものび太の元を離れない。これはのび太が成長しないことと無関係ではなく、子どもの成長を描く児童文学とコミックは、内包するメッセージが違う。『サザエさん』『ちびまる子ちゃん』も同様である。

魔法に対する大人の立ち位置について考えてみたい。魔法を危険視する大人としては、『ピーター・パン』のウエンディの両親、『床下の小人』の家政婦等が挙げられる。魔法が見えない、見ようとしない鈍感な大人が、『メアリー・ポピンズ』のバンクス夫妻、『千と千尋の神隠し』の千尋の両親である。『となりのトトロ』の父親もいい人ではあるが子どもに目が行かず見えていない。魔法を黙認する大人としては、『メアリー・ポピンズ』の脇役に見えているのに見えるということ認めない人が登場する。魔法を受け入れる大人は子どもたちと魔法の共犯者ともいえ、かつて魔法の国を訪れたことがある者で、ナルニアの最初『ライオンと魔女』の家の持ち主の先生や『床下の小人たち』の続編に登場するミス・メンチスのように、子どもの心をもった大人である。それから、魔法の存在認めるが商売に使おうとしたり悪用しようとする人には、『ナルニア国物語』6巻の『魔術師のおい』のえせ魔術師であるおじさんがいる。

子どもは本当に魔法を信じているのかという問いを「騙されたい子どもたち」として考えたい。ディズニーランドやゲームのバーチャルリアリティ空間のような虚構空間が本当に本物なのか半信半疑の人は少なくないのではないか。騙す・騙されるは一般的には否定的な概念だが、人は誰でも心地よく騙されたいという感覚をもっているだろう。ファンタジーはごっこ遊びmake-believeの面を持つが、ごっこ遊びでは現実感と想像の世界のバランスが課題となる。想像の世界と現実の世

界を行き来する遊びを通して、子どもは現実体験を確認する。しかし現代ではむしろ想像の世界が拡大し、現実との接点が希薄である。

『ピーター・パン』では、虚実を区別できないのはピーター・パンだけである。他の子どもたちは成長し、成長は無垢性の喪失を意味する。英語のイノセンスは無垢、無知、無罪の意味があるが、ピーター・パンだけがイノセンスを保つように、普通の子どもの無垢のままでも無知のままでもいられない。エヴリデイ・マジック作品では魔法的存在が子どもの前から去っていくが、魔法の国へ迷い込んだ子どもはどうなるのか。魔法の国の場所は子どもの心の中と示唆される。過ぎ去った遠い記憶の中、童心あるいは生まれる前にいた所かもしれない。ミヒヤエル・エンデ『はてしない物語』では物語の国ファンタージェンの女王は「幼心の君」といい、幼心に関するところに魔法の国があると考えられる。

魔法空間からの脱出に関心を向けると、アリスは最後に「あんたたちなんてただのトランプじゃない」とふしぎの国の住人に現実を突きつけ、ふしぎの国から追放される。ふしぎの国のルールを受け入れられなくなった時に魔法の国への入り口は閉じられ「ごっこ遊び」は終わる。『ピーター・パン』では、ピーター・パンの永遠の子ども性が際立つためにウエンディが自分とは異質の存在だと思い知り、自分が成長していくことに気付く。

主人公は冒険の後で、元の平凡な日常に戻ることができるのだろうか。例えばトルキン『ホビットの冒険』は『The Hobbit or There and Back Again』と、まさに「行って帰ってくる物語」という副題をもつが、主人公のビルボは冒険のすえ平凡な日常に戻る。副題が示す通り戻ることこそ意味があるという物語だが、続編の『指輪物語』によると、実はビルボは日常に適用できなくなっている。しかも『指輪物語』の主人公のフロドにいたっては、過酷な体験の末、もう2度と自分の居場所に戻らない。『ナルニア物語』では、『ライ

オンと魔女』で4人のきょうだいナルニアの王と女王になって成人する。大人になった後で自分たちが入って来た洋服ダンスを通りかかり、記憶は保ったまま子どもに逆戻りして元の日常に戻る。この展開には違和感を覚えずにいられない。最終巻の『最後の戦い』ではきょうだいのうち長女のスーザンはおしゃれに夢中になり、もうナルニアの友ではなくなりナルニアには入れなくなってしまふ。ところが「まことのナルニア」に迎え入れる他の子どもたちは、現実世界では列車事故で死亡する。つまり「まことのナルニア」は明らかに天国の象徴である。しかし、魔法にかけられた子どもたちが、異世界での冒険を通して現実世界で生きる力を得るまでの過程を描くのが児童文学の使命だとするならば、その意味でナルニア国物語は、最終部で宗教的テーマに傾きすぎて児童文学の本来の役割から逸脱しているといわざるを得ない。ナルニアのアンチテーゼとして評判を得た『ライラの冒険』では、運命に選ばれた特別な少女ライラがパラレルワールドや死者の世界まで含めた複数の世界を救う冒険をし、旅の途中に出会って運命で結ばれた少年ウィルト、最後にはそれぞれが自分の元の世界に戻る。壮大な冒険ファンタジーでありながら正統派児童文学の枠組みに収まっている。

『はてしない物語』のバスチアンは、物語の国へ入りこみ、美少年にも英雄にもなって望み通りの全てを手に入れ、そこから破滅の道に歩いて行く。記憶を失いながらも、ファンタジーエンの中で出会ったもう1人の英雄アトレユの助けを借りて元の世界に戻る。結局ファンタジーエンで得た全てのものは失うが、自分自身であることの喜びが満ちて来ることを感じながらの終末である。エンデは上質なファンタジーを用意しつつ、そこにとどまってはならないという明確なメッセージを発し、現実に戻ることを意味を伝えている。魔法の国や物語の国は人々が旅をする異世界であつて、人が現実に戻って生きるための力を得る場所

だという考えに立っている。

『プーさん』では、学齢期を迎えたクリストファー・ロビンが1日中プーさんと森の中で遊んでいるわけにはいかなくなる。物語の最後には「そこで、ふたりは出かけました。ふたりのいったさきがどこであろうと、またその途中にどんなことがおころうと、あの森の魔法の場所には、ひとりの少年とその子のクマが、いつまでもあそんでいることでしょう」とある。クリストファー・ロビンは成長するという自覚から「もう僕は多分ここに来ない」と言っており、その世界にはプーさんと他のぬいぐるみたちだけがいるというのが自然である。ところが『プーさん』の設定は独特で、現実と魔法の国との境が描かれず、親の姿は描かれないが常に作者としての父親の姿が物語の語り手として見え、クリストファー・ロビンの言葉にも、作者である父親の視点が完全に入りこんでいる。つまり、作者が魔法使いとして世界を支配している。父親の意思に操られる形で、クリストファー・ロビンは魔法の森に別れを告げさせられる。現実にも、作者A.Aミルンの息子のクリストファー・ロビン・ミルンは世間から物語のキャラクターであるクリストファー・ロビンと同一視されつづけて、生涯苦しんだ。彼は、父親でありながら誘惑者ともなったA.Aミルンに魔法の国に閉じ込められて出られなくなった。親は子どもが魔法の国に行くのを邪魔する存在であるが、本来、邪魔することに意味がある。

虚構には大きな力がある。だからこそ言葉を操って虚構を作りだす者には大きな責任が伴う。

(文責：たざわ・かおる 聖学院大学児童学科教授)

SWnet (Seigakuin Welfare Net ~聖学院大学人間福祉学科卒業生を中心とした福祉のネットワーク) 企画、聖学院大学総合研究所共催

人間福祉スーパービジョンセンター

第7回ピア・スーパービジョン

2011年2月26日(土)新都心ビジネス交流プラザにて、第7回ピア・スーパービジョンが開催された。ピア・スーパービジョンとは保健・社会福祉現場や一般企業において、対人援助の仕事をしている人たちが、実践に必要な知識やかかわりについて見直し、互いに知り合い、情報交換を行うための研修交流会である。今回のプログラムは本学人間福祉学科卒業生が中心になって組織した福祉のネットワーク“SWnet”の企画運営によるものである。本学卒業生だけでなく、一般からの参加者もあった。

高齢者福祉、障がい者福祉、精神保健福祉の分野で働く卒業生らによる報告を聞いた後、業種や職種によらない無作為の4つのグループに分かれピア・スーパービジョンを行った。それぞれ働いている職場や職種は異なっても、ソーシャルワーカーとして持つべき共通の理念を再認識し、心の中の思いや課題を共有しあった。

ゆとりを持った支援 秀村智香

1. なぜこの仕事に就いたのか

卒業後に女性や母子を対象とした緊急一時保護施設で支援員として勤務していました。1人の利用者さんと関わる時間が短く、地域で1人の人とじっくり関わりたいと思ったのがきっかけでした。

2. 仕事の悩みについて

予防プランナーとして、自己作成・委託を併せて80件程度を担当していますが、事務的な仕事が多く、利用者に関わる時間が少ないこと。他の職員にケースについての相談はできるが、事業所全体が「ケースの最終判断は担当が行う」という考え方なので、何かあった場合は公休日でも連絡が

来るので、オン・オフが上手に分けられないことが悩みでした。

援助職として働いているのに、「期限があるやらなければいけないこと」が優先になってしまい、ジレンマを感じながらも解決できない自分がいる。自分の支援方法に自信が無く、休みの日でも常に仕事が頭から離れないので、疲れがたまる。辛くても相談する相手が居ないので、1人で泣くことしかできない自分が嫌になり、さらに疲れがたまるという悪循環になっていました。

3. 悩みの解決に向けて

月に1度包括の職員で会議を行っていますが、事務的な検討や報告が多く、カンファレンスの機会がほとんど無いです。以前はプランナー同士でケースの状況等を話し合う機会を作っていました。いつの間にかうやむやになってしまいました。

情報共有についてはグループワークの中で事業所全体の考え方をすぐに変えるのは難しいけれど、身近なところから始めてみてはどうかとアドバイスをいただきました。

今までは自分の悩みやどう解決したら良いのかをなるべく考えないようにしていました。今回の発表を通じて、自分の仕事についてももう1度考えることができました。発表の機会をいただき、あ



JR北与野駅前の新都心ビジネス交流プラザにて第7回ピア・スーパービジョンが開催された。

りがとうございました。

(ひでむら・ともか 地域包括支援センターに予防プランナーとして勤務、社会福祉士、2006年度聖学院大学人間福祉学科卒業)

再び使命感をもって 高橋成子

1. 現在の仕事を志したきっかけ

私は現在NPO法人のグループホームで世話人として働いています。主に心の病や障がいをお持ちの方を対象としています。私がこの仕事を志したきっかけは、幼い頃に目撃した、知人（統合失調症）の衝撃的な行動に影響を受けたことが始まりではないかと思っています。以前から人の役に立ちたいという思いがあった私は、福祉を学ぶために大学に入学しましたが、入学後も私はその知人に対して拒否的な態度をとっていました。私の考えが変わったのは、精神保健福祉士（以下PSW）という職種があることを初めて知って専門科目を受講するようになってからです。それから私は徐々にその知人のことを理解できるようになっていきました。就職活動ではゼミの先生をはじめ諸先生方、キャリアサポートセンターの方にお世話になり、精神科クリニックに入社をしました。二年目からはグループホームで勤めるようになり、現在に至ります。

2. これまでに困ったこと、また乗り越えたこと

私はこれまでに燃え尽きに近い状態になったことが2度程ありました。最初に働いたクリニックで私はデイケアの常勤スタッフになりました。最初に大変だったのは、新人PSWの私がデイケアスタッフの中心的役割を担うということでした。それから、同じ職種の先輩がいない、ある程度のマニュアルもない、仕事量が多く、入院の手続きや地域会議の参加などでデイケアを離れるときや、



左から、コーディネーターの大島知子さん、報告者の紫藤彬子さん、秀村智香さん、高橋成子さん

看護師が処置室に行けばプログラムを一人で任せられるときもしばしばという職場環境の中で、もともと一人で抱え込み、人の評価を気にする私は、誰にも相談できず、任された仕事は断れず、そのため仕事が終わらず、毎日終バスで帰るという生活が続きました。一年目の夏頃、体重は急激に減っていき、自分を責めて抑うつ状態になり、頭の回転が鈍くなって思考停止になることも多々ありました。自分に自信が持てず、周りの職員にどう思われているのか気になって、何か言われただけで責められているように感じる精神状態になっていました。そのような中、入社して1年が経ち、新年度からグループホームに異動になりました。最初の2週間くらいは特にならなことがなく、今思えば有難い休養の時間になったと思います。

私が燃え尽きに近い状態になった理由は4つあります。①未熟なスキル（専門職として、社会人として）②組織力（仕事量、職場の処遇方針の曖昧さ、職場内で適切なスーパービジョンが受けられないこと）③サポート源（同職種の同僚や先輩がいない）そして、そこに④個人要因（問題の抱え込み、人の評価を気にする）が加わり長期化したことです。現在では、大変なこともあります、職場環境が変わり、対処法をいくつか身につけているのもあり、充実して仕事をさせていただいています。今回の振り返りでは、今後さらに自己覚

知をしていくことが大事であること、また新しい組織を作っていく力もワーカーにとって必要とされていることを確認しました。

3. 現在、悩んでいることや課題

①社会資源の幅広い理解と活用の仕方、②社会資源の開拓（入居者の希望や願望にそった支援をする際に制度の限界を痛感しています）

（たかはし・せいこ 精神科クリニックデイケアスタッフを経て、現在は足立区のグループホーム世話人として勤務、精神保健福祉士、2008年度聖学院大学人間福祉学科卒業）

第7回ピア・スーパービジョンを終えて 大島知子

今回のピア・スーパービジョンでは、はじめに卒業生3名から今職場で感じていることについて報告していただいた。それぞれ分野は異なるが、三名の報告には共通の悩みや課題があった。例えば、専門職として職場に配置され、経験年数にかかわらず責任ある仕事を任される。あるいは、職場の人員配置や業務の膨大さ等により、教わる機会がなく、一人で問題を抱えている、等である。これらは、その後のグループごとの話し合いや参加者の感想から、対人援助を行う多くの人が経験することだとわかった。大変さの中にいる時は自分の性格や自分の職場だけの問題と思っているが、参加者と話すことで、自分だけではない、と



3名の報告を受けて、ピア・スーパービジョンを行った

いう気持ちの共有ができたと思う。

報告者からはそのような状況に対して、相談できる上司や同僚の大切さ等、具体的な取り組みや方法が語られた。私としてはそのなかでも、組織の環境や考え方を改善するよう取り組むことも大切という言葉が、私にはできなかったことなので印象に残った。おそらく、グループごとのピア・スーパービジョンでも報告者の発表を受け、各自が悩みやお互いの経験を話し合い、有意義な時間を持てたと思う。私のグループは卒業生四名であったが、それぞれの言葉から学生時代に教わった共通の考え方を感じ、普段話するとき以上に話しが通じる体験をしたことは、この集まりならではだと思う。

その後の全体共有の時間には、先生方から、感想やご自身の経験についてコメントをいただいた。先生方が私たちの経験に共感し、ご自身の経験から話してくださったことはとても身近に感じられ、あたたかい気持ちになった。

人間福祉学科第1期生の中には経験年数が10年目に入る人も出てくる。また、このピア・スーパービジョンには卒業生以外にも参加者がいる。今後、卒業生が新たに加わっていくなか、参加者は先輩として迎える立場にもなり得るのではないか。そう考えると、私たちが日頃抱える悩みや経験は、マイナスなものではなく、ピア・スーパービジョン全体にとって、大きな財産になるだろう。

今回、久しぶりに会う先生、友人、先輩、後輩が大勢いた。ピア・スーパービジョン終了後の交流会の席では、初対面の人や同じ業種の人とも知り合えた。今後、相談できる仲間に出会うこともでき、貴重な時間を過ごした。

（おおしま・ともこ 地域包括支援センター勤務、社会福祉士、2002年度聖学院大学人間福祉学科卒業）

共同研究報告

【憲法研究】 アメリカ憲法と日本国憲法

2011年3月7日(月)、聖学院本部新館2階において、2010年度第11回「憲法」研究会が開催された。東京大学名誉教授で憲法学者の奥平康弘氏が「アメリカ憲法と日本国憲法」と題して発題された。以下、発題の概要を記す。

奥平氏によればアメリカ合衆国憲法の特徴はその「前文」にある。「われわれ合衆国の民は」(We the People of the United States)という言葉で始まり、「より完全なユニオンを形成するために」(in order to form a more perfect union)という言葉がそれに続く。13州それぞれが国家として政治的コミュニティとして成立したけれども、よりパーフェクトなコミュニティが「目的」としてその前文に記されていることはあまり注目されていないと氏は指摘する。すでに13州がstateとして独立しているという認識があり、今から見ればそれはとても歴史的な事柄であると奥平氏は述べられ、合衆国憲法の作り方のアメリカ的な特徴をアメリカの歴史的 성격の痕跡としてアメリカ大統領選挙などの事例を交えて紹介された。

戦前の日本の憲法はアメリカ憲法とほとんど関係のない憲法であったが、1945年以降に占領軍が大きな影響を与えるようになり、そこで初めてア

メリカ憲法を勉強しなければならないという認識に至った。そのアメリカ憲法の中心的部分には「観念」としての「自由」が非常に強くあるが、例えば表現の自由などが「実際」(practice)のこととして語られ出したのは制定の時ではなく1918-19年頃からであったという。「自由が原則である」という命題を合衆国憲法の基軸に置く立場が意味することは何かということを奥平氏はこれまで考え続けてきたと述べ、言論の自由・表現の自由などに関しても日本人として学ぶことの意義がそこにあり、また日本における妥当性もあるのだと指摘された。

発題後には例えばアメリカ合衆国の「衆」はなぜ「州」(state)ではないのかといった色々な質問がなされ、30名もの多くの出席者があり大変実り多い研究会の時となった。

(文責：豊川慎 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程)

(2011年3月7日、聖学院本部新館2階)



奥平康弘 東京大学名誉教授を迎えて開催された。

聖学院大学大学院・総合研究所 教員活動報告書（2010年度）

ふか い とも あき
深井 智朗

現職位：教授

本学への就任：1997年4月1日

最終学歴：

1996年6月 アウクスブルク大学第一哲学部（現在哲学・社会学部）博士課程修了

取得学位：

1996年6月 Dr. Phil.（アウクスブルク大学）

2005年11月 博士（文学）（京都大学）

所属学会：日本哲学会（1996年～）、日本宗教学会（1997年～）、日本基督教学会（1998年～）

担当科目：

学部 キリスト教と倫理的諸問題B（近代化とプロテスタントイズムとの関係）、ドイツ語講読B（「ドイツ人の一生」の講読）

大学院 ドイツ語文献講読/原書講読B（O・バウムガルテンの著作の講読）

学生指導：大学院博士課程のキリスト教文化学特殊研究（通年）

専門分野：近・現代ドイツ思想史、キリスト教文化学

研究テーマ：

- 1) ヴィルヘルム帝政期からヴァイマル共和国時代のドイツ・ルター派と社会
- 2) フランクフルト学派とパウロ・ティリッヒ

研究内容：

- 1) についてはヴィルヘルム帝政期の研究を終え、ヴァイマル共和国期の研究を継続している。
- 2) についてはアドルノ、ホルクハイマー、マルクーゼ、フロムとのティリッヒとの思想的交流や個人的関係についての調査研究を共同研究として行っている。

研究業績（2010年度〈2010/4～2011/3〉）

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
Ba 学術論文	The Doctrine of the Trinity and Modernity in the Japanese church from the Meiji Era to the present	Theologische Rundschau. 75 (2010), J. C. B. Mohr, Tübingen	日本の近代化におけるキリスト教的人格思想の影響についての考察	2010年12月
Ba 学術論文	An Aspect of The Jewish Question in Modern Japan: Correspondence between Leo Baeck and Tetsutarō Ariga	Zeitschrift für Neuere Theologiegeschichte/ Journal for the History of Modern Theology, 17(2010)	最近今日と大学文書館で発見したレオ・ベックと有賀鉄太郎の往復書簡の紹介と、レオ・ベック『ユダヤ教の本質』が満鉄調査部の要請で翻訳される経過についてドイツ人・アメリカ人向けに考察した。	2011年1月
C 学術論文	「レオ・ベック＝有賀鉄太郎往復書簡」、「近代日本におけるユダヤ人問題の一断面」(佐藤貴史氏との共著)	『思想』(岩波書店) 2011年1月号 No.1041	最近今日と大学文書館で発見したレオ・ベックと有賀鉄太郎の往復書簡の紹介と、レオ・ベック『ユダヤ教の本質』が満鉄調査部の要請で翻訳される経過について日本人向けに考察した。	2011年1月

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
C 学術論文	「1900年前後のアドルフ・フォン・ハルナックとマックス・ヴェーバー」	『聖学院大学総合研究所紀要』49号 (2010年)	ハルナックとマックス・ヴェーバーの往復書簡についての考察	2011年3月
C 学術論文	「『……私たちが長い間会えないでいることを大変寂しく思っています……』——エーリヒ・フロム＝パウル・ティリッヒ往復書簡及び関連書簡の解説と翻訳」(竹淵香織氏との共著)	『聖学院大学総合研究所紀要』49号 (2010年)	最近発見したティリッヒとフロムの往復書簡の翻訳と、両者の思想の比較と考察	2011年3月
C 学術論文	「『アウクスブルク宗教平和』とは何であったのか」	『キリスト教と諸学』2010年	しばしば引用される「アウクスブルク宗教平和」の「領主の宗教その地に行われる」という言葉についての考察	2011年3月
Aa 著書	「『ただ自分が受け入れられたという事実を受け取れ』——パウル・ティリッヒにおける危機と霊性」	『危機と霊性(第57回上智大学夏期神学講習会)』(日本キリスト教団出版局)	パウル・ティリッヒの思想と彼の人生における危機との関連についての考察	2011年3月
G 評論	「出版社の神学」	『福音と世界』(新教出版社)で2010年4月～2011年3月まで連載	オイゲン・ディーデリヒス等の編集者の思想が思想研究に与えた影響についての考察	2010年4月～ 2011年3月
G 評論	「プロテスタンティズムの遺伝子鑑定」	『春秋』(春秋社)2010年4月～2011年3月まで	日本の近代化とプロテスタンティズムとの関係についての考察	2010年4月～ 2011年3月
G 評論	「『キリスト教は戦後デモクラシーの担い手となり得るのか』——戦後日本と1960年のパウル・ティリッヒ」	2010年6月18日日本ピューリタニズム学会のシンポジウムでの発題	1960年のティリッヒ来日時における講演や書簡、対談の録音資料を通して戦後デモクラシーとキリスト教との関係について考察した	2010年6月

まつ たに よし あき
松谷好明

現職位：特任教授

本学への就任：2002年10月1日

最終学歴：

1967年3月 一橋大学社会学部卒

1970年2月 神戸改革派神学校3年中退

1972年9月 英国Bristol University大学院(Diploma Course) 1年間

1972年9月 英国Trinity College Bristol神学校、特別研究生 2年間

取得学位：

1973年6月 Diploma in Theology

2005年3月 Ph.D. (聖学院大学)

所属学会：日本ピューリタニズム学会

担当科目：近代社会とピューリタニズムA、近代社会とピューリタニズムB

専門分野：歴史神学

研究テーマ：ピューリタンの歴史と神学

研究内容：ピューリタンの礼拝論、ウェストミンスター信仰告白の歴史的注解、現代中国プロテスタント神学の動向

研究業績 (2010年度 (2010/4～2011/3))
下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
F 学会発表	現代中国プロテスタント神学の動向	日本ピューリタニズム学会		2010/6/19
F 学会発表	中国におけるプロテスタント神学教育の現状	聖学院大学総合研究所		2011/1/19
G 書評	John Witte, Jr., The Reformation of Rights	ピューリタニズム研究 第5号		2011/2/28

みやもと さとる
宮本 悟

現職位：准教授

本学への就任：2009年4月1日

最終学歴：

1992年3月 同志社大学法学部 卒業

1999年2月 ソウル大学政治学科 修了

2005年3月 神戸大学大学院法学研究科 修了

取得学位：

1992年3月 学士（法学）

1999年2月 政治学修士

2005年3月 博士号（政治学）

所属学会：日本政治学会（1999年～）、日本国際政治学会（1999年～）、現代韓国朝鮮学会（2000

年～）、日本ピューリタニズム学会（2008年～）、日本比較政治学会（2008年～）、日本国際安全保障学会（2010年～）

専門分野：朝鮮半島研究、安全保障論、政軍関係論

研究テーマ：南北朝鮮の対外関係と安全保障政策

研究内容：現在の核問題や米韓関係に直結する1970年代の南北朝鮮の外交政策や安全保障政策の研究。北朝鮮の武器取引や軍事政策に関する研究。

研究業績（2010年度〈2010/4～2011/3〉）

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
Ba 学術論文	DPRK Troop Dispatches and Military Support in the Middle East: Change from Military Support to Arms Trade in the 1970s	EAST ASIA (Volume 27, Number 4)	本稿では、無償援助で始まった1970年代の北朝鮮による中東への軍事協力を検討することで、1975年からの急速な外貨不足によって現在に至る中東への武器輸出が始まったことを明らかにした。	2010年11月
Bb 学術論文	韓国の電子商取引発展における軍事技術の民間移転事業：CALsの民間移転に関する金鐵煥の役割	聖学院大学総合研究所紀要48号	本稿では、電子商取引の標準規格であるCALsを韓国に導入した金鐵煥の行動や発表論文を分析することで、CALs導入が軍事技術の民間移転の一環として行われたことを明らかにした。	2010年9月
Bb 学術論文	なぜ延坪島に朝鮮人民軍は砲撃したのか？－アリソンの3つのモデルによる分析の試み－	『国際比較政治研究』20号	本稿では、延坪島事件を起こした北朝鮮の目的をアリソン・モデルによって分析することで、国際環境だけではなく、国内の組織や官僚の動向によって説明できることを明らかにした。	2011年3月

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
D 研究 ノート	国勢調査から見た韓国におけるキリスト者の現状	聖学院大学総合研究所Newsletter Vol.20 No. 1	本稿では、韓国の国勢調査で明らかになったプロテスタント教徒が減少する原因をカトリックとの比較から推察した。	2010年6月
D 研究 ノート	韓国のルーテル教会の現況と歴史(1)	聖学院大学総合研究所NewsLetter Vol.20 No. 2	本稿は、韓国のルーテル教会の歴史で、米ミズーリ・シノッドが韓国宣教を始めるまでの過程を論じたものである。	2010年9月
D 研究 ノート	韓国のルーテル教会の現況と歴史(2)	聖学院大学総合研究所NewsLetter Vol.20 No. 3	本稿は、韓国のルーテル教会の歴史で、韓国宣教が始まってから現在に至るその発展の軌跡を論じたものである。	2010年12月
F 学会発表	朝鮮人民軍の命令系統－北朝鮮はどうやって軍隊を統制しているのか？－	NK会10年6月例会	本報告では、北朝鮮ではどのように軍隊を統制しているのかを命令系統によって解説した。	2010年 6月26日
F 学会発表	対外関係と国際的制裁	2010年度アジア経済研究所夏期公開講座	本講義では、核問題をめぐる米朝交渉と六者会合の動向を解説し、さらに北朝鮮に課されている経済制裁について国連、日米の順に解説した。	2010年 7月20日
F 学会発表	Roles of Christianity for Peace in the East-North Asia	長老会神学大学シンポジウム「第14回中韓学術大会第11回国際学術大会東北アジアの平和のためのキリスト教の役割」	本シンポジウムでは、国家形成が未完である北東アジアにおいて、国家形成にキリスト教がどのように貢献できるかを論じた。	2010年 9月14日
F 学会発表	日本の対北朝鮮支援の現状と課題	聖学院大学総合研究所シンポジウム「東アジアの平和と民主主義－北朝鮮問題と日韓の役割」	本シンポジウムでは、日本の対朝援助が莫大なものであるが、制裁との関係において矛盾が生じていることを指摘した。	2010年 9月17日
F 学会発表	最近の北朝鮮における軍制改革－軍の世代交代と後継者の影響－	Foreign Policy Center研究会	本報告では、北朝鮮における最近の軍制改革について、世代交代と後継者問題から論じた。	2010年 11月24日
F 学会発表	1970年代の北朝鮮の中東に対する派兵と軍事支援の目的の変遷	韓国政治学会2010年 年例大会	本報告では、1970年代の北朝鮮による中東への派兵と軍事支援が、外貨不足によって現在に至る中東への武器輸出に変遷したことを論じた。	2010年 12月4日
F 学会発表	延坪島に対する朝鮮人民軍の砲撃の目的－アリソンの3つのモデルによる分析の試み－	関東政治社会学会 第3回研究会	本報告では、延坪島事件における北朝鮮の目的をアリソン・モデルによって分析することで、国際要因だけではなく、国内の組織や官僚の動向によって説明することを試みた。	2010年 12月18日
F 学会発表	1970年代の北朝鮮の外交方針転換と海外軍事協力の推進	東アジア地域史研究会(東京大学)	本報告では、1970年代における北朝鮮の外交方針の転換を国連と第三諸国に対する外交政策から論じた。	2011年 1月8日
F 学会発表	北朝鮮の政治と社会	横須賀市市民大学講座	本講義では、北朝鮮の政府・党機関の概要を説明すると共に、核問題に対する米朝の交渉について解説した。	2011年 1月16日

ブライアン バード

Brian Byrd

現職位 : Instructor

本学への就任 : 2003年4月1日

最終学歴 :

2007年4月 Seigakuin University Graduate School
Ph.D. Course (date entered; currently
in progress)

1984年5月 Yale University Divinity School

1981年5月 Pomona College

取得学位 :

1984年5月 Master of Divinity Yale University
Divinity School

1981年5月 Bachelor of Arts in Economics Pomona
College

所属学会 : Phi Beta Kappa National Honor Society
(1981 to present), Japanese Association for the
Study of Puritanism (2006 to present), Kagawa
Research Association (2007 to present), Japa-
nese Association for the Study of Christianity
(2008 to present)

担当科目 : Director of Seigakuin Elementary School

English Program (Grades 1, 2, 5 and 6
teacher), Seigakuin Kindergarten English
Teacher, Director of Seigakuin Kids English
Program

学生指導 : Member of Christianity Committee,
Seigakuin Mission Band Organizer

専門分野 : Modern Japanese History, Biblical
Studies, Elementary School English Education

研究テーマ :

1. Kagawa Toyohiko and post-WWII Japanese
history
2. Elementary school English education and
Japanese culture; content-based learning

研究内容 :

1. Significance of Kagawa Toyohiko for post-
WWII Japanese society and church
2. Use of content-based learning in teaching
English to children

研究業績 (2010年度 〈2010/4 ~2011/3〉)

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・ 学会名等	概要	刊行・ 発表年月
Ba 学術論文	Content-based elementary school English (vetted)	JALT 2009 Conference Proceedings	Growing morning glories and soybeans	June 2010
F 講演	Teaching Japanese Culture Using English	Tenth Annual Seminar for Teachers of English to Children, Seigakuin University	Japanese ABC Karuta and Chant— cultural studies in the classroom	July 2010
F 講演	Preparing teachers for the next day's lesson	Seigakuin University General Research Institute Teacher Training Seminar for Elementary School Teachers	Use of songs, stories, and original chants to teach children English	May 2010
F 講演	Preparing teachers for the next day's lesson	Seigakuin University General Research Institute Teacher Training Seminar for Elementary School Teachers	Preparing teachers of English to more effectively reach students	October 2010

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
F 講演	Engaging young English learners	Tokyo Metropolitan Yoga Elementary School Teacher Training Seminar	Techniques and materials that can inspire English learners	July 2010
F 講演	Preparing for the new English course	Setagaya-ku, Yoga Area Elementary Schools Teacher Training Seminar	Building confidence as a teacher of English: ready-to-try strategies and activities	Aug 2010
F 講演	Using games and songs to inspire children	Tokyo Metropolitan Yoga Elementary School Teacher Training Seminar	Teaching the English Note topics; Using simple and effective games	Aug 2010

ふじ わら ま ち こ
藤原真知子

現職位：特任講師

本学への就任：2003年4月1日

最終学歴：1976年5月 Ottawa University

取得学位：

1976年5月 B.A.小学校における第二外国語としての英語教授法

所属学会：JACET全国大学英語学会（2003年～）、JALT全国語学教育学会（2003年～）、JASTEC日本児童英語教育学会（2003年～）、東京私立初等学校協会外国語部会（2005年～）

担当科目：総合研究所主催小学校英語指導法セミナー年2回（小学校教員向け英語指導法講義・実践）、聖学院小学校英語（1年生・2年生・3年生・6年生）、聖学院幼稚園英語（年長ク

ラス）、キッズ・イングリッシュ（幼稚園年少児と母親・小学生1～6年）

学生指導：英語・英検指導、小学校教員英語指導サポート

専門分野：早期英語教育・児童英語教員養成

研究テーマ：「英語の使える児童」の育成・児童英語指導法

研究内容：低学年から文字指導に焦点をあてた英語指導法、コンテンツ・ベースによる小学校英語教育、公立小学校における英語指導と教員英語研修、小・中連携の英語教育、英語による日本の文化・習慣の発信とクロスカルチャーを取り入れた英語教育

研究業績（2010年度〈2010/4～2011/3〉）

下表参照

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
F 講演	こうやって教えよう 小学校英語：現場からの提案	聖学院大学総合研究所 2010年度第1回小学校英語指導法セミナー（新都心ビジネス交流プラザ） 後援：埼玉県教育委員会、上尾市教育委員会、さいたま市教育委員会	1.コンテンツ・ベースによる小学校英語教育：社会科の内容を取り入れた英語指導 2.日本の風習を取り入れた発信型小学校英語教育の実践とその効果	2010年5月

区分	題名	掲載誌・発行所・学会名等	概要	刊行・発表年月
Ba 学術論文	Content-based elementary school English(査読付)	JALT 2009 Conference Proceedings	小学校における内容重視教育(Content-based instruction :CBI)の授業実践とその考察(共著)	2010年6月
F 講演	英語で日本の文化を伝えよう	聖学院大学第9回小学校教師英語指導法講座(聖学院大学)	日本の遊び、食事のマナーを児童が外国の人に伝える試みとその成果	2010年7月
F 講演	小学校英語指導法	東京都世田谷区立用賀小学校教員英語研修	フォニックスの指導法、文部科学省配布「英語ノート」の使い方	2010年7月
F 講演	担任指導による英語の授業	東京都世田谷区立桜町小学校教員英語研修	日本の文化紹介を英語の授業に取り入れる	2010年7月
F 講演	小学校英語指導法	埼玉県越生班英語研修 毛呂山町立川角小学校	児童と楽しむ英語活動	2010年8月
F 講演	担任教員が行う英語指導法	東京都世田谷区用賀地区教員英語研修	児童が積極的に英語を使うようになるアクティビティーと児童の様子を紹介	2010年8月
F 講演	「Listening + 3 skills」から始まる英語の世界	国際外国語教育研究会 神奈川大学(招待講義)	リスニングを中心とした3スキル(スピーキング、リーディング、ライティング)育成の児童英語教育(共同)	2010年9月
F 講演	こうやって教えよう 小学校英語:チャンツで楽しむストーリー	聖学院大学総合研究所 2010年度第2回小学校英語指導法セミナー 後援:埼玉県教育委員会、上尾市教育委員会、さいたま市教育委員会	チャンツを用いて日本の昔話を英語で語る授業実践とその効果について—公立小学校・私立小学校での試み	2010年10月
D 研究ノート	日本の文化・習慣を英語で発信	聖学院大学総合研究所NEWSLETTER 20-4号	日本の文化・習慣を英語で外国の人に伝えるとき児童は積極的になり、英語学習のモチベーションにつながる	2011年3月

総合研究所 News

2010 年度 聖学院大学学術セミナー
聖学院大学総合研究所

日韓現代史研究センター主催

北朝鮮問題と日米韓の対応

— 実地結果— アンケート集計結果の概要 —

北朝鮮の韓国領砲撃は朝鮮半島の厳しい南北対立を浮き彫りにし、東アジア情勢は一気に緊迫した。さらに北朝鮮の核兵器開発と核実験は地域の安全保障への重大な脅威となり、核不拡散体制も揺さぶっている。その背景にあるのは、金正日総書記から三男・正恩氏への権力移行と経済の苦境である。問題解決と地域の安定回復には、軍事最優先を掲げる北朝鮮の内部事情と日韓米中ロ5カ国の政策の両面からのアプローチが必要である。とくに価値観を共有し、冷戦期から長期的に同盟関係を維持してきた日韓米の協力が緊要である。東アジア・日米関係と南北朝鮮関係の専門家が危機の解法を語る。

日時 2011年2月26日(土) 13:30～16:00

場所 女子聖学院中学校・高等学校クロウソンホール

【プログラム】

挨拶 大木英夫（聖学院大学総合研究所所長、学校法人聖学院理事長）

講演1 「オバマ政権の東アジア政策と米朝関係」
李鍾元（立教大学副総長）

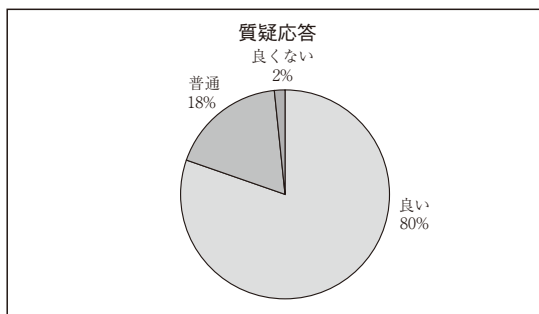
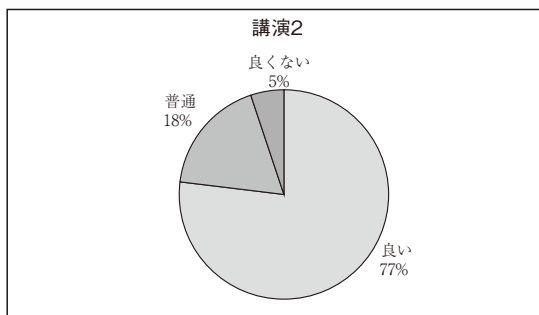
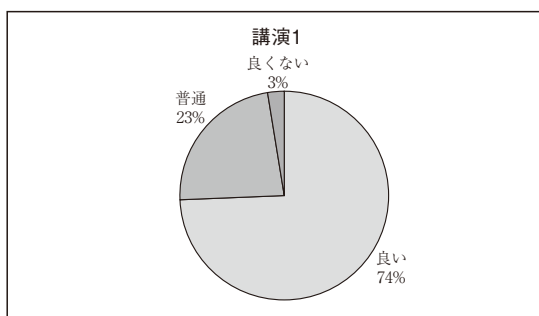
講演2 「北朝鮮の三代世襲が南北関係に及ぼす影響」
康仁徳（聖学院大学総合研究所客員教授、元統一部長官）

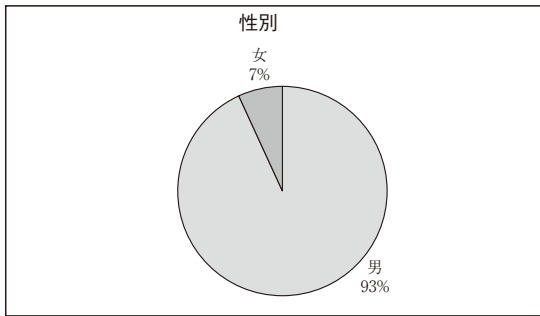
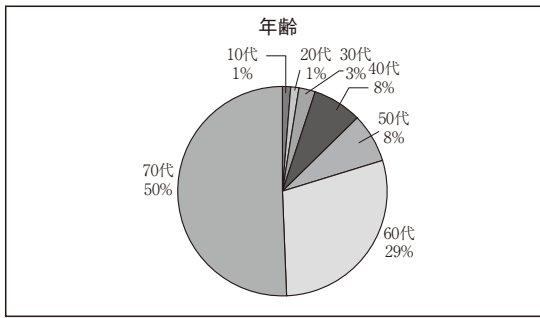
質疑応答

司会 小田川興（聖学院大学総合研究所客員教授）

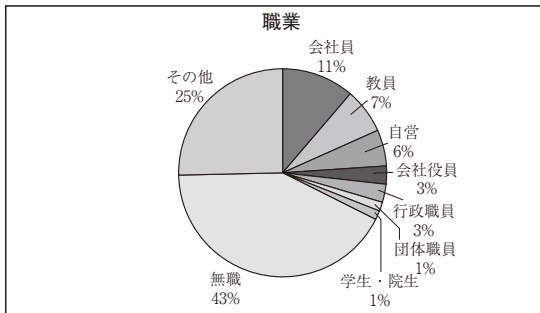
【結果の概要】

- ・セミナー参加者は193名。内、アンケート回答者は79名だった。
- ・講演について、講演1は「良い」が74%、講演2は「良い」77%となった。質疑応答は「良い」が80%であった。
- ・自由意見として、「大変有意義なものだった」「勉強になった」「時間が短かった」など。

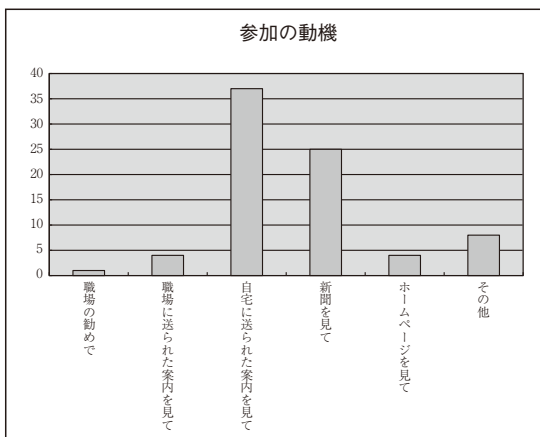




* 回答者のプロフィールとして、年齢別には「70代」が半数を占め、続いて「60代」29%となった。性別は、「男性」が9割以上を占めた。



* 職業別には、「無職」が43%と最も多かった。「その他」の内容として、「アルバイト」「自由業」「ジャーナリスト」など。



* 参加の動機としては、「自宅に送られた案内を見て」が最も多く、次に「新聞を見て」となった。「その他」としては、「友人の紹介」「先生の勧め」「知人の紹介」「前回も参加したから」など。

自由意見

- ・北朝鮮は横田めぐみさんはじめ、多数の方が拉致されて関心を持つようになりました。金正日体制が崩壊したら拉致問題は解決できる糸口になるのでしょうか。
- ・お二人とも大変よかったが、もっと詳しく聞きたいと思うので、もう少し時間が欲しい。1人90分くらい。
- ・「日米韓の対応」と言うとは具体的には「力」による方向にあると思いますが、私としては平和的な対応をして欲しい。「平和的対応」と言えば、相手が困っている部分を助けるのが効果的だと思います。「座して待つ」のも積極的な方策の場合があるとは思いますが、もっと積極的な姿ではないでしょうか？
- ・セミナーの大テーマが「日韓米の対応」であったにもかかわらず、両氏とも「日本」の立場、とるべき方策について、触れることが全くなかったのはいささか物足りなく気になる。内政で手一杯、とりあげる価値もないといってしまうえばそれまでだが。
- ・時節柄、大変貴重なセミナーであり、出席できて光栄に思います。特に講師の李先生、康先生は、この問題の最高権威の人物であります。日頃から李先生は雑誌、TVでお見受けしています。又、康先生は小生の尊敬する金大中元大統領



李 鍾元 立教大学副総長



康 仁徳 聖学院大学総合研究所客員教授、元韓国統一省長官



女子聖学院中学校・高等学校のクローソンホールにて開催された。

- 領の側近として、大変な役割を全うされた高潔な方と存じています。次回セミナーも是非参加させていただきたく。ありがとうございました。
- ・中東情勢の急変という中であって、北朝鮮をめぐる東アジアの位置をどう考えたらよいのか、という疑問を解きほぐしてくれる内容の講演でした。まだこれからも流動的な展開をいずれの地でもすることが予想されますが、今回のお話の中に基調となるべきものが含まれていることも感じます。ありがとうございました。
 - ・こんなに広範囲な話題がカバーされるとは思っていませんでした。ありがとうございました。
 - ・日本の拉致問題は、2国間交渉が必要と思うが、2国内交渉の可能性はあるのか？拉致問題が進展しないのは、対話がないからと思うが、制裁ばかりしていてラチがあかないのではないかと？建設的なお考えがあれば教えて下さい。
 - ・政治的テーマと別に、市民生活（衣食住、人材、等）をテーマにも取り上げて欲しい。質問の時間ももう少し拡充して欲しい。
 - ・最近の中東（エジプト・リビア）情勢に乗ずる形で、韓国政府が北朝鮮側に向けて、民衆の蜂起をけしかけるといった放送を始めたということが伝えられています。これは相手国政府をいたずらに刺激するものであり、南北間の緊張を高めてかえって良くないと思います。なお、司会者の方が最後にして提案された内容が良かったと思います。
 - ・「北朝鮮」についてその実情を私はあまりに知らなさすぎると考えていて、今日の講演会に参加

- しました。お二人のお話は、世界の政治問題として、大いに学ぶものがありました。ただ、個人的には、私には平和のために何ができるのかという事が今日の情勢下で、質疑応答の中に大いにありました。もちろん私自身の問題なので、何らかの事はしていますが。
- ・李教授が国籍も市民権もほとんどない。との発言ですが、これだけの日本語を話されるのですから、大いに発言を歓迎したい。康先生の経験を日本政府側はどう見ているのか？
 - ・2人の講師の話は大変説得力のある、有意義なものでした。シンポの話は特にリアルで参考になりました。康先生の体験に裏打ちされたお話は、我々が日常対岸視していることを痛感させられ反省しました。時折お話を聞きたいと思いました。
 - ・南北の現状を大変興味深く聞かせていただきました。ありがとうございました。
 - ・2つの講演はどちらも時間が足りないと思いましたが、レジュメが役立ちました。
 - ・マスコミの報道を理解する上で大いに役に立ちました。ありがとうございました。
 - ・中東情勢が北朝鮮に与える影響等、もう少し聞きたかった。
 - ・マスコミを通してではなく、直接聞いたことが良かった。
 - ・大変勉強になりました。
 - ・北朝鮮は10年後も存在するだろうか？
 - ・北朝鮮は金正日が建国し、憲法も党規約も「金正日国家」「金正日民族」を強調し、金正日は遺

訓統治者に過ぎず、金正恩も遺訓統治者にすぎない。従って、全国に300以上ある金正日の銅像が破壊されたときに北独裁体制は崩壊する。北朝鮮は「金正日の亡霊支配の国」である。1995年訪朝時新しい手帖に「この国は金正日亡霊支配の国などと高麗航空機上で書いて空港に降り立つことを思い出す。

平壤は農村部を削って縮小したが、この国のショーウィンドーであり「トマト族」しか住めない。平壤市を壊滅したら、金一族独裁体制は崩壊か？

- ・大木理事長による説明で聖学院の歴史、平和観がわかった。
- ・総研の問題意識の説明（大木先生）に納得。
- ・北朝鮮を取り巻く情勢の難しさが良く分かり、大変に有意義なお話でした。
- ・専門家の先生方の講演、大変勉強になりました。今後もこうした講演、研究会を続けて欲しいと考えます。
- ・講師2人の講演内容は大変良かった。レジュメも充実していた。時間が足りないのもう1時間延長してほしい。
- ・せつかくの講演なのにマイクに対しての注意不足。特に李先生の講演の際、はっきり聞こえない。もったいない感じ。康先生は結構でした。質疑応答の時間があつたのは良かった。
- ・北朝鮮問題はまさに中国との問題である。中国に対しては賛同する多国間による包囲網を作ること。
- ・大変有意義な講演会でした。日本にとって隣国との関係なので、今後とも余談を許さない大切な問題について、新しい知識を学ぶ事ができた。朝鮮半島、中国について常に学ぶ必要を痛感した。会場も立派で今後もよろしく願います。
- ・明確なメッセージ主張があり、学ぶことの多いセミナーでした。ありがとうございました。
- ・回答者の真摯な態度に好感をもった。時間が足りないのが残念。
- ・レジュメ（講演要旨）を頂け、理解を深めることができ、感謝します。
- ・康先生は、韓国統一省で北朝鮮を担当されてい

ただけに言葉に重みがあった。KBSの放送で北兵士が脱北する1970年代の事例を聞き、国家としての働きかけの重要性がわかった。

- ・時間が足りません。講師を2人にしぼり、日本語のみでのセミナーでしたので、かなり変わりましたが、それでも時間が足りません。もう一工夫お願いします。
- ・李先生の大変整理された説明は頭の中にすっきりと入りました。大変分かりやすいお話でした。康先生も長年の経験に裏打ちされた証言でした。ただご高齢の講師に立ってお話いただくのはお疲れではないでしょうか。講演形式もいいですが、お2人の対談方式もよろしいかと思えます。
- ・北朝鮮はやくざの団体である。世襲など許されない。日本も早く天皇家を廃止すべきだ。
- ・質疑応答の時間をもっと多くしてもらいたい。
- ・全体的に時間が短すぎる。2時間半から4時間取りたい。質疑応答がほとんどなかった。
- ・講演時間40分は短いので、1人当たり1時間位欲しい。
- ・講演者のマイクの調整が悪く、聞きにくい面がありました。
- ・音声のボリュームが小さくて、聞こえなかった。もったいなかった。
- ・マイクの音量が小さく講演の内容が聞きにくかった。
- ・李氏の講演ではマイクの設定位置が悪く、十分に内容を聞き取れなかった。残念！
- ・マイクの使い方（講演者の）への運営上の配慮が足りなかった。途中から改良されたが残念



193名の参加者があつた。

だった。

- ・講演はマイクが悪くて、あまり聞き取れず困りました。
- ・李鍾元先生と康仁徳先生のお話はマイクの位置が悪く、半分も聞き取れなかった。(趣旨はいただいた資料で勉強した) マイクは質疑応答時のように手に持って話しては如何でしょうか。
- ・会場に机のないのが残念でした。

人間福祉スーパービジョンセンター
第7回 ピア・スーパービジョン
実施結果—アンケート集計結果の概要—

ピア・スーパービジョンとは保健・福祉現場などで対人援助の仕事をしている人たちが、同じ悩みや課題を持つ者として語り合い、日々の業務を見直すための研修交流会である。今回のプログラムは本学人間福祉学科卒業生を中心とした福祉のネットワークSWnet (Seigakuin Welfare Net) の企画運営によるものである。前半は3人の卒業生による福祉現場からの報告を聞き、後半は4つのグループに分かれてピア・スーパービジョンを行った。

日時 2011年2月26日(土)13:30～16:30
場所 新都心ビジネス交流プラザ4階会議室

【プログラム】

挨拶 柏木 昭(聖学院大学総合研究所名誉教授、スーパービジョンセンター顧問)
増山章子(聖学院大学人間福祉学科2004年度卒業)

ピア・スーパービジョンとは？

相川章子(聖学院大学人間福祉学科准教授)

卒業生からの報告

「障がい者福祉分野から」

紫藤彬子(人間福祉学科103W、2006年度卒業)

「高齢者福祉分野から」

秀村智香(人間福祉学科102W、2005年度卒業)

「精神保健福祉士から」

高橋成子(人間福祉学科104W、2007年度

卒業)

ピア・スーパービジョン

4つのグループに分かれての自由討議

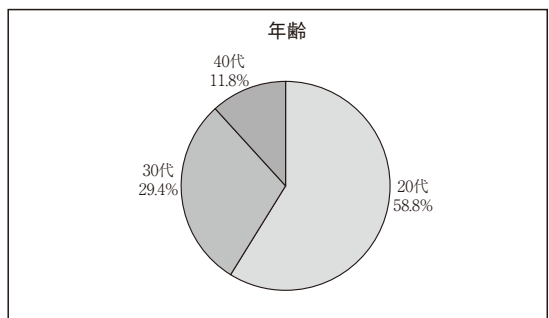
全体共有

コーディネーター 大島知子(人間福祉学科99W、2002年度卒業)

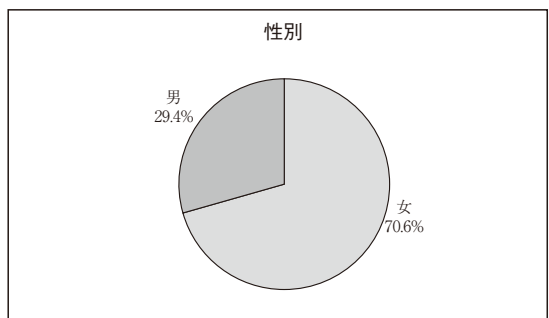
司会 長澤大輔(人間福祉学科98W、2001年度卒業)

*参加者25名のうち17名から回答があった。

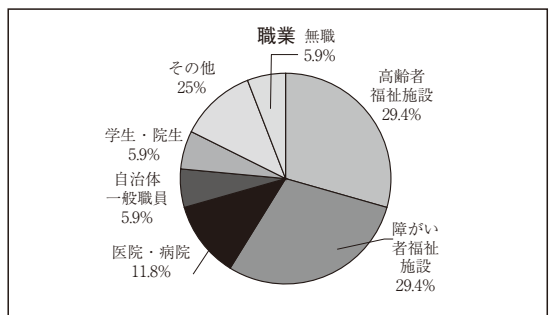
1. あなたのプロフィールについて



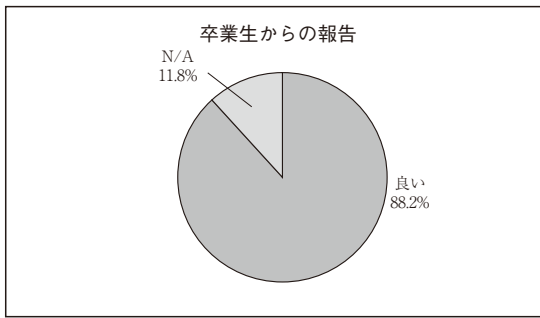
*20代が約6割、30代が3割、40代が1割であった。



*女性が7割を占めた。



*高齢者福祉施設と障害者福祉施設に勤める人が最も多かった。ついで病院・医院勤務であった。



* 無回答を除くと良いという評価であった。

2. 卒業生からの報告

- ・あれも同じ、これも同じというように、共感できる部分が全部で、発表全体で共通のテーマがあって聞きやすかった。
- ・実体験をお聞きできて共感でき、すごくよかった。
- ・大変な思いを乗り越えてきたこと、共感できることが多かった。
- ・私もそうだったと共感できるお話がきけてよかったと思います。
- ・さまざまは施設の方の思い、悩みがきちんと表れていて大変良かったです。
- ・現場は違うけれど、悩みが同じとわかると、悩むことは悪いことではないと思えました。
- ・福祉の現場で働く方の話は、共感することも多く、同じようにつらく感じます。じっくりと報告を聞くことができるので、他の職場の様子がわかって良かったです。
- ・独りでないんだと感じることができました。
- ・ご自分のことがよくわかっている方々ですごい



3人の卒業生による、対人援助の現場からの報告を聞いた。

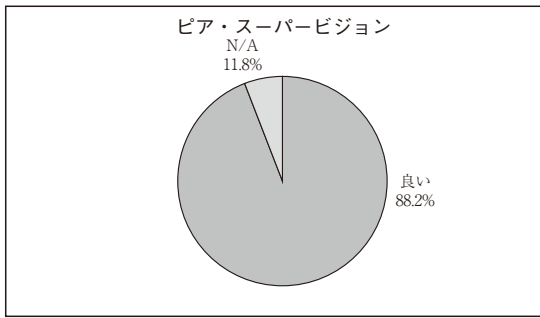


4つのグループに分かれてピア・スーパービジョンを行った。

- ・なあと感心するばかりでした。
- ・ステキなワーカーがたくさんいて、そのような人たちに出会えて良かったです。
- ・大変勉強になりました。
- ・私はPSW（精神保健福祉士）として現場で働いた経験はまだありませんが、現場で働く方からの生の声（悩み、問題、考え方などさまざまな思い）を聞くことができ、仕事へのイメージがわきやすくなりました。ネットや情報誌ではわからないことを聞くことができたと思います。
- ・現場の生の声が聞けて、不安要素が少し強くなりましたが、先輩方の体験談を参考にしてこれからがんばっていきたいと思いました。

3. ピア・スーパービジョン

- ・ワーカー独りで働く方が“気持ちを吐き出す場”ができてよかったと思います。たとえ解決はしなくても、この場が有る無いでだいぶ変化があると思いました。
- ・先輩の乗り越えた経験の話が聞けて良かったです。発信して受け入れてもらえ、別の視点で話していただけるプロセスで、また気づきを得られて良かったです。
- ・素直な気持ちで話ができる場は本当に必要だと思いました。
- ・今、自分の悩みに対して客観的に見つめることができた。
- ・少人数であったため話やすく、ランダムなグループ分けであったが全く違和感がなかった。
- ・（グループが）4人という人数でゆっくり発言が



* 無回答を除くと良いという結果であった。

できよかった。

- ・どんな話になるか心配でしたが、すごく参考になった。
- ・いろいろな話ができてよかったと思います。
- ・初めて会う方もいるので、打ち明けて話をしていくには少し時間がかかるようです。時間が足りないとも思いました。自分の話をしてできて満足しています。
- ・これから社会に出て、福祉の仕事をする中で役に立つことをたくさん教えていただけてよかったです。
- ・これからも参加したいです。

4. 自由意見

- ・ピア・スーパービジョンの機会を作っていただきありがとうございました。職場でもこういう場を作れるようにできたらと思います。ここでの気づきをまずは身近な人に発信することから始めたいです。
- ・自分の気持ちを確認する良い機会になりました



実践現場でのかわりについて、互に見直し、思いを共有し、自己点検へとつなげてゆく。

た。ありがとうございました。

- ・また参加したいと思います。いろいろな職場の悩み、そしてその解決の方法がよくわかりました。
- ・せっかく広い会場を使っているのに、たくさんの方が来場してくれたらいいなと思った。卒業生以外の方もいらしてくれているので、仕事の話をしてできてよかった。柏木先生からご助言をいただきはげみになりました。職場に早く帰って取り組んでみたいです。
- ・悩みがどうしてもなく大変になる前には助けを求めさせていただきます。
- ・続けていただいで感謝するとともに、今後とも続けていただければと思います。第8回も参加したいと思います。
- ・大変ためになりよかったです。
- ・また参加したいです。
- ・人数が少なくて残念。

2010 年度研究報告書の発行

- ・『聖学院大学人間福祉スーパービジョンセンター年次報告書』A4判、28頁、2011年3月31日発行
- ・『地域主権——3つの論点』B5判、37頁、2011年3月31日発行

聖学院大学総合研究所 Newsletter

Vol. 21-1, 2011

2011年6月30日発行

発行人 大木 英夫

発行所 聖学院大学総合研究所

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎1-1

TEL: 048-725-5524 FAX: 048-781-0421

e-mail: research@seigakuin-univ.ac.jp

Homepage: <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>

聖学院大学総合研究所

〒362-8585 埼玉県上尾市戸崎 1-1

Tel : 048-725-5524 Fax : 078-781-0421

E-mail : research@seigakuin-univ.ac.jp

Home Page : <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>

Seigakuin University General Research Institute

1-1, Tosaki, Ageo-shi, Saitama-ken, 362-8585 Japan

Phone : 048-725-5524 Fax : 048-781-0421

E-mail : research@seigakuin-univ.ac.jp

Home Page : <http://www.seigakuin-univ.ac.jp>